

口永良部島から得られたカエルアンコウ科魚類カエルアンコウモドキ

吉田朋弘¹・木村祐貴²・本村浩之³¹ 〒 890-0065 鹿児島市郡元 1-21-24 鹿児島大学大学院連合農学研究所² 〒 599-0311 大阪府泉南郡岬町多奈川谷川 2926-1 大阪府立環境農林水産総合研究所³ 〒 890-0065 鹿児島市郡元 1-21-30 鹿児島大学総合研究博物館

■ はじめに

日本産カエルアンコウモドキ属 *Antennatus* は、ムチカエルアンコウ *A. flagellates* Ohnishi, Iwata and Hiramatsu, 1997 とカエルアンコウモドキ *Antennatus* sp. の 2 種で構成されている (瀬能, 2013)。そのうちカエルアンコウモドキはこれまで国内では奄美群島奄美大島からのみ標本に基づき記録されていた (瀬能ほか, 1994; 瀬能, 2013)。

2016 年 8 月 19 日に大隅諸島口永良部島において、カエルアンコウモドキが 1 個体採集された。本標本は本種の大隅諸島の初記録であるため、ここに報告する。

■ 材料と方法

計数・計測は瀬能・川本 (2002) にしたがった。標準体長は体長と表記し、デジタルノギスを用いて 0.1 mm までおこなった。標本の作製、登録、撮影、および固定方法は本村 (2009) に準拠した。本報告に用いた標本は、鹿児島大学総合研究博物館に保管されており、体色の記載に用いた生鮮時のカラー写真は同館の画像データベースに登録されている。本報告中で用いられている研究機関略号は以下の通り：KAUM (鹿児島大学総合研究

博物館)；KPM (神奈川県立生命の星・地球博物館)；YCM (横須賀市自然・人文博物館)。

■ 結果と考察

Antennatus tuberosus (Cuvier, 1817)

カエルアンコウモドキ (Fig. 1)

標本 KAUM-I. 90896, 体長 27.9 mm, 鹿児島県熊毛郡屋久島町口永良部島浦底, 30°29'16"N, 130°09'09"E, タモ網, 水深 10-15 m, 2016 年 8 月 19 日, 木村祐貴。

記載 背鰭 3 棘 12 軟条 (すべて不分枝)；臀鰭 7 軟条 (最初と最後の 1 本の軟条が不分枝)；胸鰭 11 軟条 (すべて不分枝)；腹鰭 1 棘 5 軟条 (すべて不分枝)；尾鰭 9 軟条 (上端の軟条は不分枝, 他は分枝)。

体各部測定値の体長に対する割合 (%)：全長 130.5：頭長 65.5：吻長 9.7：眼径 6.1：両眼間隔 16.0：体幅 40.7：体高 61.2：尾柄高 17.1：吻上棘長 22.3：背鰭第 2 棘長 9.8：背鰭第 3 棘長 23.4：背鰭最長軟条長 21.0：臀鰭最長軟条長 20.2：胸鰭最長軟条長 28.8：尾鰭最長軟条長 27.7。

体は卵型で著しく側扁する。尾鰭は丸い。体表は小棘で覆われる。吻上棘は長く、先端に明瞭な皮弁を欠く。背鰭第 2 棘は基部から先端にかけて、後方に曲がる。吻上棘を除く背鰭棘と軟条部は、厚い皮膚で覆われ、小棘が密に分布する。臀鰭最終軟条の後部の鰭膜と尾柄部が連続する。鰓孔は胸鰭腋部下に位置する。胸鰭は体側中央に位置する。

生鮮時の色彩 頭部は赤褐色で、頭部を除く体の地色は黄色で褐色の斑模様を形成する。吻上

Yoshida, T., Y. Kimura and H. Motomura. 2017. First record of *Antennatus tuberosus* (Lophiiformes: Antennariidae) from Kuchierabu-jima island, Osumi Islands, Kagoshima Prefecture, southern Japan. *Nature of Kagoshima* 43: 63-65.

✉ TY: the United Graduate School of Agricultural Sciences, Kagoshima University, 1-21-24 Korimoto, Kagoshima 890-0065, Japan (e-mail: k5299534@kadai.jp).

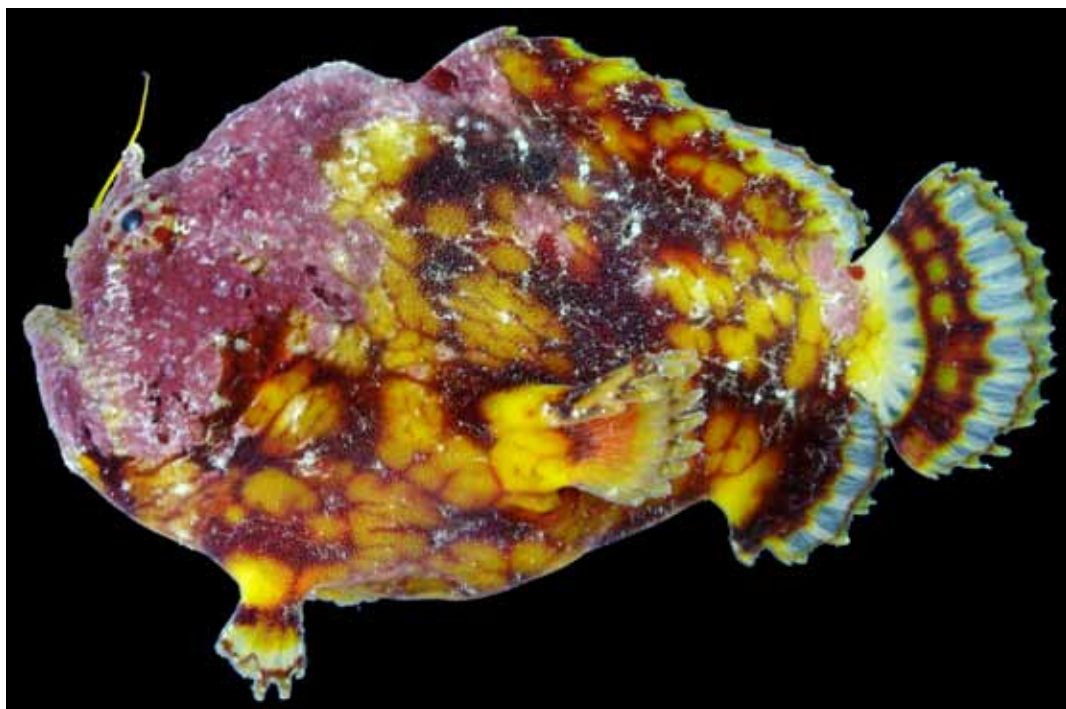


Fig. 1. Fresh specimen of *Antennatus tuberosus*. KAUM-I. 90896, 27.9 mm standard length, Urasoko, Kuchierabu-jima island, Osumi Islands, Kagoshima, southern Japan.

棘は黄色。背鰭第2棘，第3棘は頭部と同色。背鰭軟条部，胸鰭軟条部，腹鰭軟条部，および臀鰭軟条部は体色と同様であるが，縁辺に細い褐色線を有する。尾鰭は地色が透明で，中央部に褐色の不完全な網目模様があり，縁辺部は細い褐色線と黄色を呈する。

分布 *Antennatus tuberosus* はインド・太平洋に広く分布する (Pietsch and Grobecker, 1987; Allen and Erdmann, 2012)。本種は国内では大隅諸島口永良部島と奄美群島奄美大島から標本に基づき記録されている (瀬能ほか, 1994; 本研究)。さらに，本種は水中写真によって東京都小笠原諸島父島 (KPM-NR 38011)，静岡県大瀬崎 (KPM-NR 35600)，黄金崎 (KPM-NR 80717)，和歌山県熊野灘 (KPM-NR 85300)，高知県柏島 (KPM-NR 38835)，沖縄県沖縄諸島伊江島 (KPM-NR 22584)，宮古諸島宮古島 (KPM-NR 5485)，宮古諸島伊良部島 (KPM-NR 68616)，および八重山諸島石垣島 (KPM-NR 13117, 28368, 28369, 81798,

81799, 94261, 94262)からも確認された。したがって *A. tuberosus* は国内では小笠原諸島，伊豆半島 (静岡県大瀬崎)以南の太平洋沿岸，および琉球列島に広く分布していることが示唆された。

備考 口永良部島から採集された標本は，鰓孔が胸鰭腋部下にあること，吻上棘先端に明瞭な皮弁を欠くこと，臀鰭の後端は尾柄部と鰭膜で連続することなどから，瀬能 (2013) が記載したカエルアンコウモドキの標徴とよく一致したため，本種に同定された。

口永良部島産カエルアンコウモドキの吻上棘長は，背鰭第2棘の2.3倍であり，Pietsch and Grobecker (1987) と瀬能 (2013) が示した背鰭第2棘の1.5-2.0倍とわずかに異なるが本研究では個体変異とみなした。

瀬能ほか (1994) は，*A. tuberosus* を鹿児島県奄美大島から得られた1個体 (YCM-P 29624, 体長48.8 mm) に基づき，日本初記録として報告するとともに，新標準和名イザリウオモドキを提唱

した。その際、体表を覆う小棘の形状と尾鰭の上・下端が不分枝であることを疑問視するも、*A. tuberosus* と同定した。また、イザリをはじめとする9つの差別用語を含む11属32種の標準和名は、日本魚類学会標準和名検討委員会(2007)により改名すべきという結論のもと改称され、イザリウオモドキはカエルアンコウモドキとして扱われている。その後、瀬能(2013)は、体表を覆う小棘の形状と尾鰭の上・下端が不分枝であることに再度疑問を抱き、カエルアンコウモドキの学名を *Antennatus* sp. とし、本種の分布域を奄美大島とフィリピン諸島のみと表記した。

本研究では口永良部島産個体の体表にある小棘の先端を剥がすと二叉状の突起が露出し、Pietsch and Grobecker (1987) の *A. tuberosus* の記載とよく一致することが明らかとなった。さらに、口永良部島の尾鰭軟条は、上端のみ不分枝で、他は分枝であったため、これは体サイズや個体差によるものであると考えられる。以上からカエルアンコウモドキに充てるべき学名は *A. tuberosus* であると判断した。また、口永良部島から採集された1個体は、カエルアンコウモドキの大隅諸島からの初めての記録ならびに標本に基づく分布の北限更新記録となる。

Pietsch and Grobecker (1987) は本種の生息水深を表層から73 m であるとし、Allen and Erdmann (2012) は1–73 m (通常10 m 以浅) と記載した。また、瀬能ほか(1994)が報告した奄美大島産の標本は水深3 m から採集された。本報告で用いた口永良部島産の標本は水深10–15 m の岩礁の割れ目から得られており、国内各地の水中写真は水深5–17 m で撮影されている。

■ 謝辞

本報告を取りまとめるにあたり、小枝圭太博士・稲葉智樹氏(KAUM)、坂上 嶺氏・齊藤洗介氏・上原大知氏・岡本直大氏・小山内泉帆氏・小出佑紀氏・葛原裕恒氏・藤本将也氏(広島大学)、日比野友亮博士・松尾 怜氏(三重大学)、三木涼平氏・和田英敏氏(宮崎大学)、下光利明氏(水産研究・教育機構)には標本の採集にご協力いた

だいた。峯 健氏・寺田和人氏(口永良部島漁振会)、貴船 森氏(口永良部島本村区)には調査の円滑な遂行にご協力いただいた。瀬能 宏博士(KPM)にはカエルアンコウモドキに関する有益な情報を提供していただいた。鹿児島大学総合研究博物館ボランティアの皆さまには標本の作製・登録作業等を手伝っていただいた。同博物館魚類分類学研究室の皆さまには標本採集の協力や本原稿に対し適切な助言をいただいた。以上の諸氏に対して謹んでお礼を申し上げる。本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島県産魚類の多様性調査プロジェクト」の一環として行われた。本研究の一部は笹川科学研究助成金(29-747)、JSPS 科 研 費(19770067, 23580259, 24370041, 26241027, 26450265)、JSPS 研究拠点形成事業—アジア・アフリカ学術基盤形成型—「東南アジア沿岸生態系の研究教育ネットワーク」、国立科学博物館「日本の生物多様性ホットスポットの構造に関する研究プロジェクト」、文部科学省特別経費「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点整備」、公益財団法人屋久島環境文化財団「屋久島生物多様性保全研究活動奨励事業」、および鹿児島大学重点領域研究環境(生物多様性プロジェクト)学長裁量経費「奄美群島における生態系保全研究の推進」の援助を受けた。

■ 引用文献

- Allen, G. R. and Erdmann, M. V. 2012. Reef fishes of the East Indies. Vols. 1–3. Tropical Reef Research, Perth. xiii + 1292 pp.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp. <http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/staff/motomura/dl.html>
- 日本魚類学会標準和名検討委員会. 2007. 日本産魚類の差別的標準和名の改名最終勧告. <http://www.fish-isj.jp/info/070201.pdf>
- Pietsch, T. W. and D. B. Grobecker. 1987. Frogfishes of the world: systematics, zoogeography, and behavioral ecology. Stanford University Press, Stanford. xxii + 420 pp., 56 pls.
- 瀬能 宏. 2013. カエルアンコウ科. Pp. 537–542, 1883–1885. 中坊徹次(編), 日本産魚類検索 全種の同定, 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- 瀬能 宏・林 公義・横山貞夫. 1994. 奄美大島で採集された日本初記録のイザリウオモドキ(新称). I. O. P. Diving News, 5 (12): 2–3.
- 瀬能 宏・川本剛志. 2002. 日本から初記録のヒメヒラタイザリウオ(新称). I. O. P. Diving News, 13 (4): 2–6.